

巻 頭 言

平成 23 年 3 月 11 日 14 時 46 分、大学 1 号館の 8 階の研究室で、私は学生 4 名と面談中に大きな揺れを感じました。いつもとは違う長く大きな揺れに不安を感じながら、学生と一緒に机の下にもぐり皆でしっかりと腕を組み、「大丈夫、大丈夫、必ず地震は治まるから」と自分に言い聞かせながら揺れが治まるのを待ちました。東日本大震災です。

震災の被害状況は、死者 1 万 5467 人、行方不明 7482 人（6 月 20 日現在）、避難者 12 万 4594 人（6 月 2 日現在）という未曾有の大惨事になりました。震災によりお亡くなりになった方のご冥福をお祈り申し上げます。また、津波や福島第 1 原子力発電所の事故による被害のため、避難所での生活を余儀なくされている方に一刻も早い復興がなされ、自宅に戻り安全で快適な生活ができることを心から願っております。

震災後、悲しく痛ましい記事ばかりを目にしていた中で、3 月 28 日読売新聞の夕刊に久しぶりに明るい記事を見つけました。見出しは「子供救った三陸の知恵」。その一つをご紹介しますと東日本大震災による津波で大きな被害を受けた岩手県釜石市では、津波に備えた知恵や工夫が功を奏して全小中学生約 2900 人のうち、地震があった 3 月 11 日に早退や病欠をした 5 人を除き、それ以外の児童、生徒についてはほぼ全員の無事が確認されているそうです。市では防災教育に力を入れており、津波から身を守る方法として「津波てんでんこ」があるといいます。これは「津波の時は親子であっても構うな。一人ひとりがてんでばらばらになっても早く高台へ行け」という意味を持ち、その背景には 1896 年の明治三陸地震の時に家族が助け合おうとして逃げ遅れ、地域そのものが崩壊するケースが相次いだことがあるそうです。それからしても、「てんでんこ」は、自分ひとりが助かればよいとするようでありながら、実は、家族を信じそして近くにいる人への互助精神に基づいた行為のようです。今回の避難では中学生が、隣接した小学校の児童の手を引いて逃げる姿が多くみられたといいます。

津波から子供たちを救えたのは、地元在住の津波の体験者が、小学校、中学校に出かけて、津波の恐ろしさを紙芝居などで伝えていくという地道な活動があったからこそであり、自分の命は自分で守るという実際の状況に即した避難訓練が、功を奏したものでしょう。

私たちも今回の震災を機に、自分の身は自分で守ることを本気になって考えなければなりません。大学では、震災後も今までとあまり変わらない形式的な避難訓練が行われています。もし、同じような震災が起きたらと考えると、大学としての早急な対応はもちろん必要ですが、一人ひとりが自分自身の震災対策を早急に立てておかなければなりません。今回の震災はまた、震災前の暮らしがどんなに豊かで幸せであったのかを気づかせてくれました。近年、私たちの生活は加速度的に快適な生活を追い求めて進んでいます。しかし、震災や原発の事故により今までの価値観や経済の状況は大きく変わっていることから、これを機に本当に必要なものは何かを考える必要があります。環境デザイン学科では、生活に潤いをもたらすデザイン力を養うことを目標としています。まさに今、一人ひとりが震災後にデザインにできることは何かを考え、行動しなければならないと思います。

3 月 16 日に予定されていた卒業式は、震災のために大学全体での式を挙行することができず、27 日に学科ごとの会となりましたが、環境デザイン学科では 185 名の学生が、元気に学び舎を巣立っていきました。本紀要には、その卒業生全員の卒業研究のテーマも巻末に掲載していますので、研究成果と併せてご覧いただければ幸いです。（環境デザイン学科長 角田由美子）